

落が幾つも発達して、下荒井・中荒井・上荒井と分けて呼ぶようになったに違いない。それを一つの部落の名称から拡大して、或る地域、特に政治的区画を指すようになる、既に地名の起原になった湧水との関係は薄れてくる。

中荒井村が旧鶴沼川、現在大川と呼び、或は官庁で阿賀川という名で統一している大氾濫原の真ただ中、即ち中州に、相当古くより人々の住みついた所であろうことは想像される。その中州も、阿賀川大扇状地の輪中としては、最も大きく、早くより干上った地域ではなからうかと思われる。

寛文五年（一六六五）と貞享二年（一六八五）の書上帳の写しが残っているが、今から約三〇〇年前には北河原・小林河原・御伊勢河原・関根河原・宮在家河原・げんちやう河原・ごぜん河原など大小七つの河原のあったことが記してある。

この中の村南三町余にあった御膳河原というのは、既に南北三十五間、東西九間の小さい草刈り場になっていたらしいが、文化六年（一八〇九）の新編会津風土記には、昔は大きな河原であり、鶴沼川（現在の太川）の水道が変じて、後に田圃に開き、今僅に残っているに過ぎないと説明してある。

この中州に、現在も決して洪水がやっこないとは言いきれない。大正二年の洪水の詳細は既に洪水の項で述べたが、高田橋より上流で土堤が決潰し、三本松・下米塚を押し切って中荒井村にまともに襲い、村中の道路で四〇〇五センチもの水深があったことがある。

村東には現在も土堤の名残を止め、特に旧郷頭小森健次宅の東側に二重の土堤がある。

村の西南旧鶴沼川跡とみられる御膳河原などに、近年まで旧河道の名残を止め、村東の低地は近年まで太川の氾濫がつづき、南の羽黒山より堰きあげた思い堀が、一筋の太川の旧河道に沿うもので、中州に発達した部落の